児童発達支援におけるソーシャルスキルトレーニング指導要綱

第 1 章 総則

本指導要綱は、児童発達支援事業においてソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）を実施する際の基本的な考え方及び実施方法を定めるものである。支援者は本要綱に基づき、個々の児童の特性や発達段階に応じた適切な支援を行うものとする。

第 2 章 基本方針

SST の実施にあたっては、以下の基本方針に基づいて支援を行うものとする。

児童の発達段階や個別特性を十分に考慮し、スモールステップでの学習を基本とする。支援者は常に児童の反応を観察し、適切な難易度調整を行う。また、成功体験の積み重ねを重視し、児童が自信を持って学習に取り組める環境を整備する。さらに、習得したスキルの般化を促進するため、家庭や教育機関との密接な連携を図る。

第 3 章 プログラム構成

発達段階に応じたプログラムを以下の通り構成する。

第 1 節 初期段階プログラム

初期段階では、基本的なコミュニケーションスキルの習得を目指す。アイコンタクトや基本的な挨拶から開始し、徐々に「ありがとう」「ごめんなさい」などの社会的な言葉の使用へと発展させる。この段階では、個別対応を基本とし、児童が安心して取り組める環境を整備することが重要である。支援者は、児童の様子を細かく観察し、適切なタイミングで介入を行う。

- アイコンタクトの練習
- 基本的な挨拶（おはよう、さようなら等）
- 「ありがとう」「ごめんなさい」の使い方
- 順番待ちの練習
- **第 2 節 中期段階プログラム**
- 中期段階では、感情認識と表現、および他者とのやりとりスキルの向上を目指す。感情カードや表情写真を活用し、様々な感情の理解と適切な表現方法を学習する。また、簡単な質問と応答、友達との遊び方のルール理解など、相互的なコミュニケ

ーションスキルの習得を図る。この段階では、2-3 人程度の小グループでの活動を取り入れ、実践的な学習機会を提供する。

- 感情の認識と表現（嬉しい、悲しい、怒りなど）
- 簡単な質問と応答
- 友達との遊び方のルール理解
- 物の貸し借りの練習
- **第 3 節 応用段階プログラム**
- 応用段階では、集団活動への参加スキル、および問題解決能力の向上を目指す。相手の気持ちの推測と共感、適切な自己主張と譲歩のバランスなど、より高度な社会的スキルの習得を図る。この段階では、実際の集団活動の中での練習を重視し、支援者は必要に応じて介入を行う。

- 集団での活動参加
- 相手の気持ちの推測と共感
- 問題解決の方法
- 自己主張と譲歩のバランス

2. 具体的な指導方法

3. **第 4 章 指導方法**
4. **第 1 節 モデリング**
5. 支援者は適切な行動モデルを示し、児童が模倣を通じて学習できるよう支援する。視覚教材を積極的に活用し、成功例と失敗例の両方を提示することで、適切な行動の理解を促進する。モデリングの際は、児童の理解度に応じて説明の詳しさを調整し、必要に応じて動作を分解して示すなどの工夫を行う。

- 支援者が見本を示す
- 視覚教材（写真やイラスト）の活用
- 成功例・失敗例の両方を提示
- **第 2 節 ロールプレイ**
- 日常生活で実際に起こりやすい場面を設定し、実践的な練習を行う。支援者は最初に相手役を務め、児童が安心して練習できる環境を整える。徐々に子ども同士の練

習へと移行し、実践的なスキルの定着を図る。ロールプレイの際は、場面設定を明確にし、必要に応じてセリフカードなどの補助教材を活用する。

- 日常生活で起こりやすい場面を設定
- 2-3 人の小グループでの練習
- 支援者が相手役を務める
- 徐々に子ども同士の練習へ移行
- **第 3 節 フィードバック**
- 支援者は具体的な褒め言葉を用い、児童の成功体験を強化する。改善点の指摘は建設的かつ優しい表現を用い、児童の自尊心を傷つけないよう配慮する。また、児童自身による振り返りの機会を設け、自己評価能力の向上を図る。

具体的な褒め言葉の使用

- 改善点の優しい指摘
- 子ども自身の振り返り
- 他の子どもからの感想

3. 環境設定の工夫

4. **第 5 章 環境設定**
5. **第 1 節 物理的環境の整備**
6. 訓練室は過度な刺激を制限し、児童が集中できる環境を整備する。視覚的な手がかり（行動手順の掲示、感情カードなど）を適切に配置し、児童の理解を促進する。座席配置は活動内容に応じて柔軟に変更し、適切な人数設定（3-5 人程度）を心がける。

- 刺激を制限した静かな空間
- 視覚的な手がかり（行動手順の掲示等）
- 座席配置の工夫
- 適切な人数設定（3-5 人程度）
- **第 2 節 心理的環境の整備**

- 児童が安心して活動に参加できるよう、受容的な雰囲気づくりを心がける。失敗を恐れない環境を整備し、チャレンジする姿勢を積極的に評価する。個人のペースを尊重し、無理のない支援を行う

- 安心できる雰囲気づくり
- 失敗を恐れない環境
- 成功体験を重視
- 個人のペースの尊重

4. 評価とフォローアップ

5. **第 6 章 評価とフォローアップ**
6. **第 1 節 定期的な評価**
7. 行動観察記録とスキルチェックリストを用いて、定期的な評価を実施する。評価結果は支援者間で共有し、支援方針の見直しに活用する。また、保護者からのフィードバックも積極的に収集し、総合的な評価を行う。

- 行動観察記録
- スキルチェックリストの活用
- 保護者からのフィードバック
- 支援者間での情報共有
- **第 2 節 般化への支援**
- 習得したスキルを様々な場面で活用できるよう、家庭との連携を強化する。保護者に対して具体的な実践方法を提案し、日常生活での般化を促進する。また、成功事例を積極的に共有し、支援の効果を高める。

- 家庭での実践方法の提案
- 保護者との連携
- 様々な場面での練習機会の設定
- 成功事例の共有

5. 保護者支援との連携

6. **第 7 章 保護者支援**
7. **第 1 節 情報共有**
8. 定期的な面談と連絡帳を活用し、支援の進捗状況や課題を共有する。家庭での様子を詳細に聞き取り、支援方針の調整に反映させる。また、保護者の不安や疑問に丁寧に対応し、信頼関係の構築を図る。

- 定期的な面談
- 連絡帳の活用
- 家庭での様子の聞き取り
- 支援方針の確認
- **第 2 節 家庭での実践支援**
- 保護者に対して具体的な声かけ方法や褒め方をアドバイスし、家庭での実践をサポートする。困った際の対処法を具体的に提示し、保護者が自信を持って対応できるよう支援する。

- 具体的な声かけ方法の提案
- 褒め方のアドバイス
- 困った時の対処法の共有
- 成功体験の積み重ね方

6. 個別支援計画への組み込み

第 8 章 個別支援計画

第 1 節 計画の策定

7. 児童の発達段階や特性を考慮し、具体的で達成可能な短期目標を設定する。長期的な成長を見据えた計画を立案し、定期的な見直しと調整を行う。優先順位を明確にし、効果的な支援の実施を図る。

- 具体的で達成可能な短期目標
- 長期的な成長を見据えた計画
- 定期的な見直しと調整
- 優先順位の明確化

- **第 2 節 計画の実施と評価**
- 支援計画に基づき、計画的な SST を実施する。実施状況を詳細に記録し、定期的な評価と計画の見直しを行う。評価結果は保護者と共有し、今後の支援方針の検討に活用する。
- **付則**
- 本指導要綱は令和 7 年 4 月 1 日より施行する。